

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1118 号	氏 名	藤 森 尚 之
論文審査担当者	主 査 角 谷 眞 澄 副 査 青 山 俊 文 ・ 菅 野 祐 幸		

(論文審査の結果の要旨)

非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) は組織あるいは画像診断で脂肪肝を認め、他の慢性肝疾患を除外できる病態であり、メタボリックシンドロームの肝臓での表現型と考えられている。脂肪変性に壊死・炎症や線維化を伴いより厳格な治療介入を要すると考えられる病態が非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) であるが、現状では肝生検による病理組織学的所見によってのみ確定診断される。NAFLD の本邦での有病率は 20-30% と報告されており、その患者群から NASH をいかに拾い上げるかが課題となっている。一方、肝生検は侵襲的な検査であるため施行できる症例に限られ、サンプリングエラーも問題となる。また、肝脂肪量 (Steatosis) の評価は客観性・定量性・再現性に欠ける場合がある。この点を補う非侵襲的な肝脂肪定量法が発展しつつあり、我々は FibroScan で計測可能な controlled attenuation parameter (CAP) に着目した。

組織所見の肝脂肪量に客観性・定量性をもたせるために画像解析アプリケーションを用いて組織標本の肝脂肪量を数値化し、CAP との相関関係を検討した。

2013 年 4 月から 2015 年 12 月の間に当院で肝生検を施行し、同日 CAP 計測が可能であった NAFLD 患者 82 例を対象とした。

その結果、「藤森尚之」は以下の結論を得た。

1. CAP は肝脂肪量に有意に相関する。
2. CAP と肝脂肪量の相関関係は BMI による影響を受け、中等度以上の肥満であると有意な相関が消失する。
3. CAP と肝脂肪量の相関関係は、肝組織所見の肝細胞膨化や小葉内炎症には影響を受けないが、中等度以上の肝線維化により有意な相関が消失する。
4. FibroScan で計測される肝硬度により CAP の精度を予測できる可能性がある。

今回の研究は、NAFLD において CAP と肝脂肪量の相関を厳格に検討した最初の研究である。その結果、CAP と肝脂肪量は有意に相関するが BMI や肝線維化の影響を受けることが判明した。この結果は、今後 CAP を用いた研究を行う際や臨床評価に用いる際に重要な知見であると考えられた。従って主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。